

公営住宅居住者の耐久消費財（主に家具）の 保有の現状と課題

—22 年前の調査と比較して—

富士田 亮子

(岡山大学教育学部)

原稿受付平成 9 年 5 月 6 日；原稿受理平成 9 年 12 月 4 日

Possession and Problems of Durable Consumer Goods
(Mainly Furniture) by the Residents of Public Operate Housing

—Comparison with Investigation Conducted 22 Years Ago—

Ryoko FUJITA

Faculty of Education, Okayama University, Okayama 700-8530

In order to grasp the state of possession and use of the durable consumer goods in the house with fixed room arrangement as well as how differently those rooms came to be used, I conducted the present investigation to make a comparative study of the previous investigation made 22 years ago or 1972, and the followings are the results of my study:

1) Of the sunny rooms facing the balcony, regardless of room arrangement, the one close to the kitchen is used as the family's public space. On the other hand, those away from the sunny side are used as the family's private space such as a bedroom and religious service. Room A, in a 3 DK arrangement, is often used as a dining room in most families, but the dining room offers different aspects depending on its size per se, the family makeup, how meal is taken, and how it is connected with other rooms.

2) Room A, where the rate of placing furniture is high, serves also as the porch and the entrance to the bathroom. Together with room B, which is not spacious, Room A poses problems regarding the arrangement of furniture.

3) The possession and arrangement of furniture in respective rooms seem to be correspondingly determined by the living behaviors in those rooms. The dining furniture, sofas and beds are determined by room arrangement and the size of respective rooms.

4) The basic furniture possessed by family is difficult to be affected by the family makeup, size of the family and trend of the time. At the same time, there are the pieces of furniture, acquired in accordance with respective life stage such as the growth of children as well as the aging of the family members. There are also pieces of furniture needed by the change of family lifestyle and use of rooms.

5) It should be noted that there are some equipment with novel functions such as personal computers and word processors. There is a need of space to install those new equipment.

6) The present investigation found a larger number of simple furniture and furniture with plural functions than 22 years ago. Those furniture designed for sitting lifestyle is disappearing.

7) The above tendency was also observed in the thirteen families who had continued to live at the same place over my previous investigations.

(Received May 6, 1997; Accepted in revised form December 4, 1997)

Keywords: public operate housing 公営住宅, durable consumer goods 耐久消費財, furniture 家具, family life cycle 家族周期, living behavior 生活行為.

1. 緒 言

近年、家具を中心とした耐久消費財は、十分に市場に出回り、選択性が高くなっている。さらに、物保有についての価値観の変化や椅子式生活の定着により、物保有率が高くなり¹⁾、多くの家具等に囲まれた生活を営んでいる²⁾。

これらの家具を中心とした耐久消費財は、住空間内での占有率が高いことから、それ自体機能的であっても住空間との関係が不都合な場合、本来の機能を十分に果たせなくなったり、生活様式を拘束することとなる。しかし、住空間はますます限定されていることから、家具を中心とした耐久消費財の保有や使用を考慮にいれて有効に使うことが望まれている。

そこで、今報告では、22年前(1972年)の調査³⁾と比較し、間取りの一定した住宅における家具を中心とした耐久消費財の保有状況の変化を把握し、生活上必要な家具等の定性化を試み、家族生活との関連性からライフステージごとに出現する課題、また、住宅タイプをめぐる課題を明らかにし、家具を中心とした耐久消費財の保有と住生活のあり方を考えようとするものである。

2. 研究方法

(1) 調査対象地および対象住宅

調査対象地は前回の調査地である広島市営東浄団地の第一種住宅である。この団地は広島駅からバスで20分前後の距離にあり、1970年から入居が始まった建築後25年の階段室型、片廊下ツイン型の28棟からなる中層住宅団地である。間取りは3K、3DKの2種類であり、ここでは前者を3Kタイプ、後者を3DKタイプとする。この団地を調査地としたのは当時の最も新しいタイプであり、また、増築、増床が不可能であることから、生活財保有についての問題が最も現れやすいと考えたからである。平面図は図1に示すとおりで、室面積は3Kタイプが46.69m²、3DKタイプが50.01m²である。以後、台所をA室、3畳の部屋をB室、台所に接し、またバルコニーまたはいりかわに面した6畳、または4.5畳の部屋をC室、6畳の部屋をD室とする。A室を除いて畳敷きの和室である。

(2) 調査対象者

調査対象者は入居世帯の主婦またはそれに代わる人である。

(3) 調査方法

調査方法は留め置き自記法によるアンケート調査で

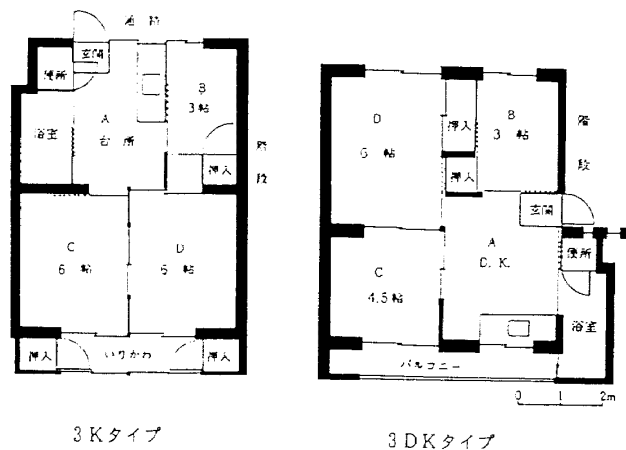


図1. 住宅タイプ

ある。有効数は3Kタイプ109票、3DKタイプ36票、計145票で、回収率は69%である。

(4) 調査内容

調査内容は前回調査と比較するため、前回と同じく、室の使い方、室内の床面積を占めるとされる家具を中心とした耐久消費財42種の保有の有無、使用場所、使用者、入手時期や入手方法である。前回調査の調査内容は鈴木のアナケート票を参考にしたものである⁴⁾。前回選定した耐久消費財は50種であるが、今回はその中で、近年小型化していたり、床面専有が低くなっている品目を除く一方、新たに市場に出回りだした品目を加えて42種を選定した。

(5) 調査時期

調査時期は1994年10月である(前回調査は1972年6月)。

3. 結果および考察

(1) 対象家族および住宅の概要

22年前と今回の対象家族および住宅の概要は図2に示すとおりである。住宅タイプ間で大差がないので全体としてみることにする。今回調査では夫の年齢は40歳以上が59%、妻は40歳以上が61%であり、夫の平均年齢は46.2歳、妻は44.3歳である。平均家族人数は3.0人で、親と未成年の子からなる核家族は43%である。また、小学生以下の子どもがいる家族は34%と少なく、未成年の子のいない家庭が51%みられる。22年前では夫の平均年齢は33.2歳、妻は30.4歳であり、平均家族人数は3.6人で、また、就学前の子は64%であったことからすると、今回は夫婦の年齢が高まり、家族人数が減少し、夫婦のみや成人中心の家族が増加している。

公営住宅居住者の耐久消費財（主に家具）の保有の現状と課題

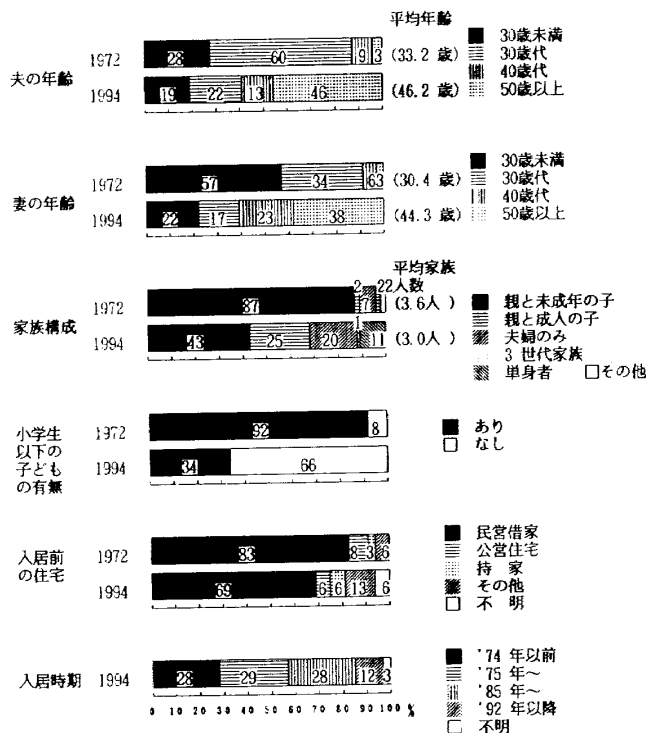


図2. 対象家族および住宅の概要

現住宅入居前の住宅は両調査共に民営借家が最も多く、入居年は1974年以前が28%、1975～1984年が29%、1985年以降が40%であり、建築当時から入居している家庭が9%、入居後10年以上が57%みられることは入居後の移動の少なさを示し、年齢構成を高める要因となっている。

(2) 間取り別生活行為室

各々の生活行為がどの室で行われているかを22年前の結果と共に間取り別に図3に示した。22年前の食事室は3KタイプではA室とC室、3DKタイプではA室であったが、それぞれC室とA、C室の利用に移行した。3Kタイプでは3食とも約7割がC室を使うようになり、朝食、夕食の室の変更はほとんどみられない。一方、3DKタイプでは朝食はA室67%とC室33%であるが、夕食はA室42%、C室55%となり、くつろぎを含んだ夕食は畳敷きのC室に移っている。3KタイプのA室が食事室として用いられていないのは、3DKタイプに比べて狭く、A室全体が玄関、衛生空間、各室への通路となるばかりでなく、玄関からも食事場所が目につくためと考えられる。どの部屋を食事に使用しているかについてはカイ自乗検定の結果、間取り間に有意差がみられた。

就寝は両タイプともに差がなく、それぞれD室が最もよく使われている。団らん、接客は3Kタイプで

は変化していないが、3DKタイプではD室の利用は少なくなり、ほとんどC室で行われるようになっていく。

読書・書き物や洗濯物をたたむ・アイロンかけの家事は22年前にはB、C、D室で行われていたが、今回はC室中心になっている。バルコニーまたはいりかわに面したC、D室の使用はますます増え、日当たりのよい室を多目的に使い、大半の行為を1室で行っている。C室は転用して用いられる事が最も多く、在宅時の家族の公的、私的行為の両面に用いられている。これらの行為室として3DKタイプの方がC室の利用が多く、また、A室の利用もみられることは、A、C室共にバルコニーに面していることやA室がDKタイプで食卓と椅子を設置していることによる。団らん、接客、衣に関する家事作業についてはカイ自乗検定の結果、間取り間に有意差がみられた。

子どもの勉強には22年前はB、C、D室が使われていたが、両タイプ共にB室使用が多くなっている。B室は衣に関する家事には用いられなくなり、子ども専用室、または家族人数が少ないときには就寝に用いられて、利用が限定している。

生活行為別に室の使い方をみると、食事にはA室またはC室、就寝にはD室、団らん、接客、読書・書き物、アイロンかけ・洗濯物をたたむにはC室、子どもの勉強にはB室が用いられる傾向である。夫の読書・書き物などの私的行為も団らんや接客を行うC室で行われ、C室に生活行為が集中していることが窺える。ベランダまたはいりかわに面したC室、D室ではA室に近い室が家族の集まる公的空間、他方、奥まった室が私的空間となり、就寝空間の独立性を高める住み方となっている。3DKタイプのA室はわずかであるが団らん、接客、読書・書き物およびアイロンかけ・洗濯物をたたむもみられ、食事以外の用途にも用いられる傾向である。

(3) 家具数と平均保有率

1) 保有総家具数

今回調査の保有総家具数は3Kタイプでは最低10個、最高41個、20個以上が65%で平均22.3個、3DKタイプでは最低16個、最高33個、20個以上が73%を占め、平均22.5個である。22年前には両タイプの平均個数は20.3個、22.5個であったことからすると、3Kタイプでは増加の傾向で、両タイプ間の差が縮まっている。

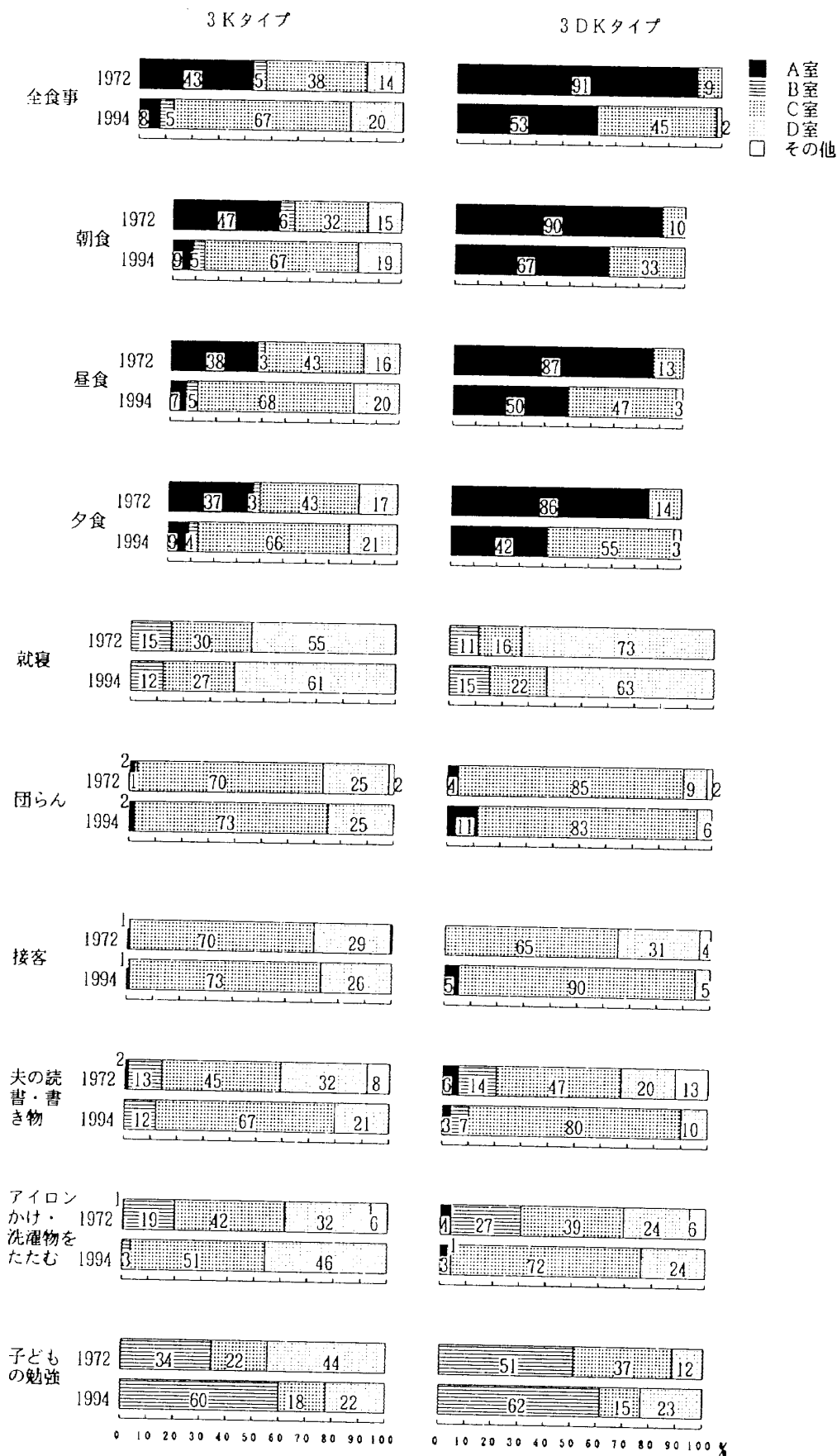


図3. 間取り別生活行為室

公営住宅居住者の耐久消費財（主に家具）の保有の現状と課題

2) 平均保有率

今回調査の調査品目 42 種を保有率順にあげると表 1 のとおりである。両タイプともに保有率 100% 以上、すなわち、複数保有しているのはテレビ、洋服ダンス、整理ダンス、扇風機である。95% 以上は洗濯機、ストーブ類、本棚、冷蔵庫、食器棚である。一方、ティーテーブル、ソファ類、ベッド類、ベビーダンス、電子オルガン、ピアノ等は 10% 以下であり、ブレザーダンスの保有はまったくみられない。そのうち、3K タイプでは本棚、ミシン、洋服掛け、電話台の、3DK タイプでは勉強机と椅子、食卓と椅子、衣裳ケースの保有率が高くなっている。

22 年前と今回調査との保有率の増減をみると表 2 のようになる。今回の方が増加しているのはテレビ、洋服ダンス、扇風機の複数保有品、計量米櫃、ワゴン、電話台、仏壇、勉強机と椅子、電子オルガン、などであり、台所用台家具の増加は著しい。和ダンスは保有率が 79% で洋服ダンス (126%) に比べて少ないものの、22 年前には 68% であったことからすると増加の傾向である。妻の年齢が高くなるにつれて保有率が高くなることは、和服着用の機会が増加していることが窺える。

一方、今回の方が減少しているのは電気こたつ、ス

トーブ類の暖房機器、ちゃぶ台、座卓・和机の床座家具、鏡台類、ミシン、下駄箱の婚礼調度品、ベビーダンス、ベビーベッドの乳児用家具、ダブルベッド、二段ベッドのベッド類や一人掛けソファ、ティーテーブルの椅子座家具である。そして、年次変化の少ないのは本棚、ピアノ、洗濯機、ステレオ、長ソファ、冷蔵庫であり、今回調査には座卓としての機能を備えた家具調こたつ、レンジ台、多目的棚である三段ボックス、衣類収納の基本的機能のみの洋服掛け、衣裳ケースやパソコン・ワープロ、などの前回調査時以降に市場に出回りだしたものが出現している。

3) 保有品の変化

表 2 から保有品の変化についてみると、座卓・和机、ちゃぶ台等の床座家具や電気こたつが減少し、家具調こたつの保有率が高いことは、1 年中室内に出して使うことのできる高級な複数機能を備えた種類に買い替えられていることを示している。電気こたつは使用季節外の収納空間の確保の困難さや出し入れの億劫さから、季節に係わらず室内に出して使うことのできる多機能な機器の利用を促している。

ソファ類では一人掛けソファ、ティーテーブルの減少は、セットで入手したものがそれぞれ別々に用

表 1. 平均保有率 (1994)

	全体 (%)	3 K (%)	3 DK (%)		全体 (%)	3 K (%)	3 DK (%)
1. テレビ	130	130	131	22. ステレオ	41	39	44
2. 洋服ダンス	126	125	128	23. ワゴン	39	38	42
3. 整理ダンス	118	114	130	24. 座卓・和机	36	39	28
4. 扇風機	115	114	117	25. 電話台	34	39	17
5. 洗濯機	98	96	103	26. 仏壇	34	36	28
6. ストーブ類	97	96	100	27. サイドボード	32	33	28
7. 本棚	97	106	69	28. 衣裳ケース	29	24	44
8. 冷蔵庫	96	96	96	29. パソコン	25	26	22
9. 食器棚	96	94	100	30. 飾り棚	23	20	33
10. 下駄箱	86	82	97	31. ちゃぶ台	17	18	11
11. 和ダンス	79	78	81	32. 長ソファ	11	14	3
12. 家具調こたつ	75	73	78	33. ティーテーブル	10	13	6
13. 計量米櫃	71	71	72	34. 二段ベッド	10	9	11
14. 鏡台類	65	65	64	35. シングルベッド	10	13	3
15. レンジ台	61	62	56	36. 電子オルガン	9	9	11
16. ミシン	61	77	55	37. ベビーダンス	9	9	8
17. 勉強机と椅子	60	52	83	38. 一人掛けソファ	8	7	8
18. 三段ボックス	57	59	50	39. ピアノ	6	6	3
19. 電気こたつ	54	54	53	40. ベビーベッド	5	6	0
20. 食卓と椅子	45	30	89	41. ダブルベッド	3	2	6
21. 洋服掛け	43	51	19	42. ブレザーダンス	0	0	0

表 2. 平均保有率の変化

1. 増加した家具類*

	1972 (%)	1994 (%)	1994-1972 (%)
計量米櫃	24	71	47
ワゴン	13	39	26
テレビ	111	130	19
仏壇	15	34	19
洋服ダンス	108	126	18
サイドボード	19	32	13
和ダンス	68	79	11
扇風機	106	115	9
電子オルガン	2	9	7
勉強机と椅子	54	60	6
電話台	28	34	6
シングルベッド	4	10	6
食器棚	91	96	5

* 5% 以上差のある品目

2. 減少した家具類*

	1972 (%)	1994 (%)	1994-1972 (%)
電気こたつ	101	54	-47
鏡台類	101	65	-36
ベビーダンス	42	9	-33
ベビーベッド	42	9	-33
ミシン	93	61	-32
ちゃぶ台	49	17	-32
ストーブ類	122	97	-25
ダブルベッド	22	3	-19
食卓と椅子	62	45	-17
一人掛けソファ	24	8	-16
座卓・和机	50	36	-14
整理ダンス	130	118	-12
下駄箱	94	86	-8
飾り棚	31	23	-8
ティーテーブル	16	10	-6
二段ベッド	16	10	-6

* 5%以上差のある品目

いられるようになり、長ソファのみになっていく過程がみられる。椅子座家具は室を固定し、床占有が大であるので、限られた室空間を活かすためには、用いられなくなる結果である。ダブルベッドの減少も同様なことが言える。

そして、計量米櫃 (71%)、ワゴン (39%) と台所

3. ほとんど変化していない家具類

	1972 (%)	1994 (%)
本棚	93	97
ピアノ	2	6
洗濯機	98	98
ステレオ	41	41
長ソファ	11	11
冷蔵庫	100	96

4. 1994年調査に現れた家具類 (%)

家具調こたつ	75
レンジ台	61
三段ボックス	57
洋服掛け	43
衣裳ケース	29
パソコン・ワープロ	25

5. 1972年調査時のみの家具類 (%)

ラジオ	74
プレーヤー	34
オルガン	19
衣桁	19
ソファベッド	14
籐椅子	8

用台家具の保有が増加し、あわせてレンジ台が61%みられることは、A室の設備計画が作業台のみであることから、作業台の不足を補い、収納空間の補完機能をもった台の必要性を高いものにしている。

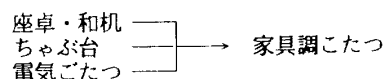
衣類収納家具は整理ダンスが減少し、洋服ダンスの増加ばかりでなく、洋服掛け、衣裳ケースと洋服収納のための最小限の機能のみの家具もみられるようになっている。衣服を吊り下げたまま収納することの必要性が高まるなかで、増床できないため、家族の成長に伴い、嵩張るダンス類は用いることができなくなっていることが窺える。

子ども用家具ではベビーダンス、ベビーベッド、二段ベッドの減少と勉強机と椅子、電子オルガンの増加は、今回の方が小学生以下の子どものいない家族が多いことによる。

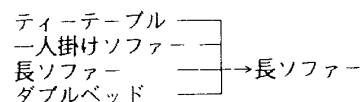
以上の保有品の変化を示すと図4のように表すことができる。A室のように台所としての用途が確立して

公営住宅居住者の耐久消費財（主に家具）の保有の現状と課題

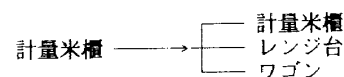
1. 床座家具と暖房機器



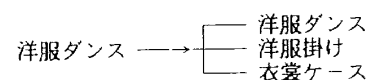
2. 椅子座家具



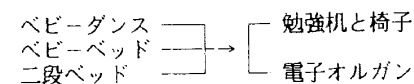
3. 台所用台家具



4. 洋服収納家具



5. 子ども用家具



1972年 → 1994年

図4. 保有品の変化

いと室の用途にあわせて関連の家具が次々求められるが、B～D室は用途転用の必要性から椅子座家具が用いられなくなり、複数機能をもつ家具や最少の機能のみの簡易な家具を用い、多くの生活行為に対応していく様子が窺える。

一方、電話、パソコン・ワープロなどは、元来、床置きを想定されていないが、実際には専用台を用いたり、床に直置きされて、床面を占めている。情報化に伴った新たな床占有品の出現である。新しい機器の導入は限られた住空間の中で居住性を変えていく要因となる。これらの機器は住宅に備えなければならない設備や空間規模の計画上の課題を示唆するものと考えられる。

4) 家族周期と家具

i) 基本的な家具：家具保有数の少ない15個未満の家庭が9家庭（22年前6家庭，今回3家庭）あるが，その9家庭で保有している家具を表3に示した。家族人数，家族構成は表に示すとおりで，間取りはいずれも3Kタイプである。22年前には6家庭では冷蔵庫，食器棚，整理ダンス，扇風機の4種が6家庭共に，ス

トープ，洗濯機，テレビ，鏡台，電気こたつ，食卓と椅子の6種が5家庭に保有されていた。そして，今回の3家庭では冷蔵庫，食器棚，洋服ダンス，洗濯機，テレビの5種が3家庭共に保有されている。これらの家具は表1に示したように全体の傾向においても95%以上の高い保有率であり，年次変化が少ない。冷蔵庫，食器棚，洗濯機は家族生活全体を支えるもので，家族状況の影響を受けにくい，どの時代においても家族全員が使用する1家庭に1個必要な基本的な家具といえることができる。

ii) ライフステージで異なる家具：家族員個人専用で用いられる割合の高い家具，また，複数保有の高い家具13種の家族周期段階別の保有率を示すと図5のとおりである。ベビーベッド，ベビーダンスは乳幼児期に，二段ベッド，勉強机と椅子，ピアノ・電子オルガン・オルガンは就学時以降に保有されている。そして，勉強机と椅子は就学児数に比例して増加し，二段ベッドは子どもが2人以上になると保有され，本棚は就学時以降増加する。また，ピアノなどの大型の楽器は女子の方が保有率が高い。ステレオ，パソコン・ワープロも今回調査では高学年から保有されている。そして，本棚を除いた就学時期の家具はその期を過ぎると保有されなくなる。今後は使用を終えたこれらの子ども用家具の処分の形態が課題となるものと考えられる。仏壇は老夫婦期や高齢単身期での保有率が高くなる傾向である。今回調査からも明らかなことは⁵⁾，これらの家具類は家族周期との関係の大きい家具である。

iii) 複数保有される家具：テレビ，洋服ダンス，整理ダンス，扇風機の複数保有品は子どもが小・中・高校生期や成人期に最大になり，家族員の成長や増加による専用化や室の用途の固定に伴い増加している。これは家具などの耐久消費財の入手のしやすさや形態・仕様の多様さばかりでなく，家族員それぞれを重視した住生活の結果，種々の家具や機器が家族員の生活行動に伴って専用で用いられるようになり，同一種の複数保有が促されたことによる。

鈴木⁶⁾は1967年に実施した日本電信電話公社アパート住み方調査において，家族周期と家具の関係からライフサイクルと無関係に購入される傾向にある家具を基本家具，ライフサイクルとの関連で購入される傾向のある家具をライフサイクル家具，前二者を複合した性格をもつ傾向のある家具を弱ライフサイクル家具と家具を大別している。今回の調査を当てはめると，基本家具に電気こたつやミシンもあげているが，

表3. 家具保有数15個未満の家庭で保有している家具の種類

(1972)					
3人 夫婦と乳幼児		3人 夫婦と乳幼児		4人 夫婦と乳幼児	
3人 夫婦と乳幼児		4人 夫婦と乳幼児		3人 夫婦と高校生	
2人 老夫婦					
1. 冷蔵庫	1	冷蔵庫	1	冷蔵庫	1
2. 食器棚	1	食器棚	1	食器棚	1
3. 整理ダンス	1	整理ダンス	1	整理ダンス	1
4. 扇風機	1	扇風機	1	扇風機	1
5. ストープ	1	ストープ	1	ストープ	1
6. 洗濯機	1	洗濯機	1	洗濯機	1
7. テレビ	1	テレビ	1	テレビ	1
8. 鏡台	1	鏡台	1	鏡台	1
9. 電気こたつ	1	電気こたつ	1	電気こたつ	1
10. 食卓と椅子	1	食卓と椅子	1	食卓と椅子	1
11. 洋服ダンス	1	洋服ダンス	1	洋服ダンス	1
12. 下駄箱	1	下駄箱	1	下駄箱	1
13. ミシン	1	ミシン	1	ミシン	1
14. —	—	ちゃぶ台	1	—	—
15. —	—	和ダンス	1	—	和ダンス
16. —	—	本棚	1	本棚	1
17. —	—	勉強机と椅子	1	勉強机と椅子	1
18. ステレオ	1	—	—	—	—
19. —	—	飾り棚	1	—	—
20. —	—	ダブルベッド	1	—	—
21. —	—	—	—	ベビーダンス	1
22. —	—	—	—	—	—
23. —	—	—	—	ソファベッド	1
24. —	—	—	—	—	籐椅子
25. —	—	—	—	—	仏壇
計	14個	13個	14個	13個	14個
(1994)					
3人 夫婦と乳幼児		4人 夫婦と乳幼児		1人 高齢単身者	
1. 冷蔵庫	1	冷蔵庫	1	冷蔵庫	1
2. 食器棚	1	食器棚	1	食器棚	1
3. 洋服ダンス	1	洋服ダンス	2	洋服ダンス	2
4. 洗濯機	1	洗濯機	1	洗濯機	1
5. テレビ	1	テレビ	1	テレビ	1
6. 鏡台	1	鏡台	1	—	—
7. 家具調こたつ	1	家具調こたつ	1	—	—
8. 扇風機	1	扇風機	1	—	—
9. 整理ダンス	1	—	—	整理ダンス	1
10. 本棚	1	—	—	本棚	1
11. 計量米櫃	1	—	—	—	—
12. レンジ台	1	—	—	—	—
13. ベビーダンス	1	—	—	—	—
14. ストープ	1	—	—	—	—
15. —	—	サイドボード	1	—	—
16. —	—	—	—	食卓と椅子	1
17. —	—	—	—	和ダンス	1
18. —	—	—	—	電話台	1
19. —	—	—	—	仏壇	1
20. —	—	—	—	下駄箱	1
計	14個	10個	13個		

公営住宅居住者の耐久消費財（主に家具）の保有の現状と課題

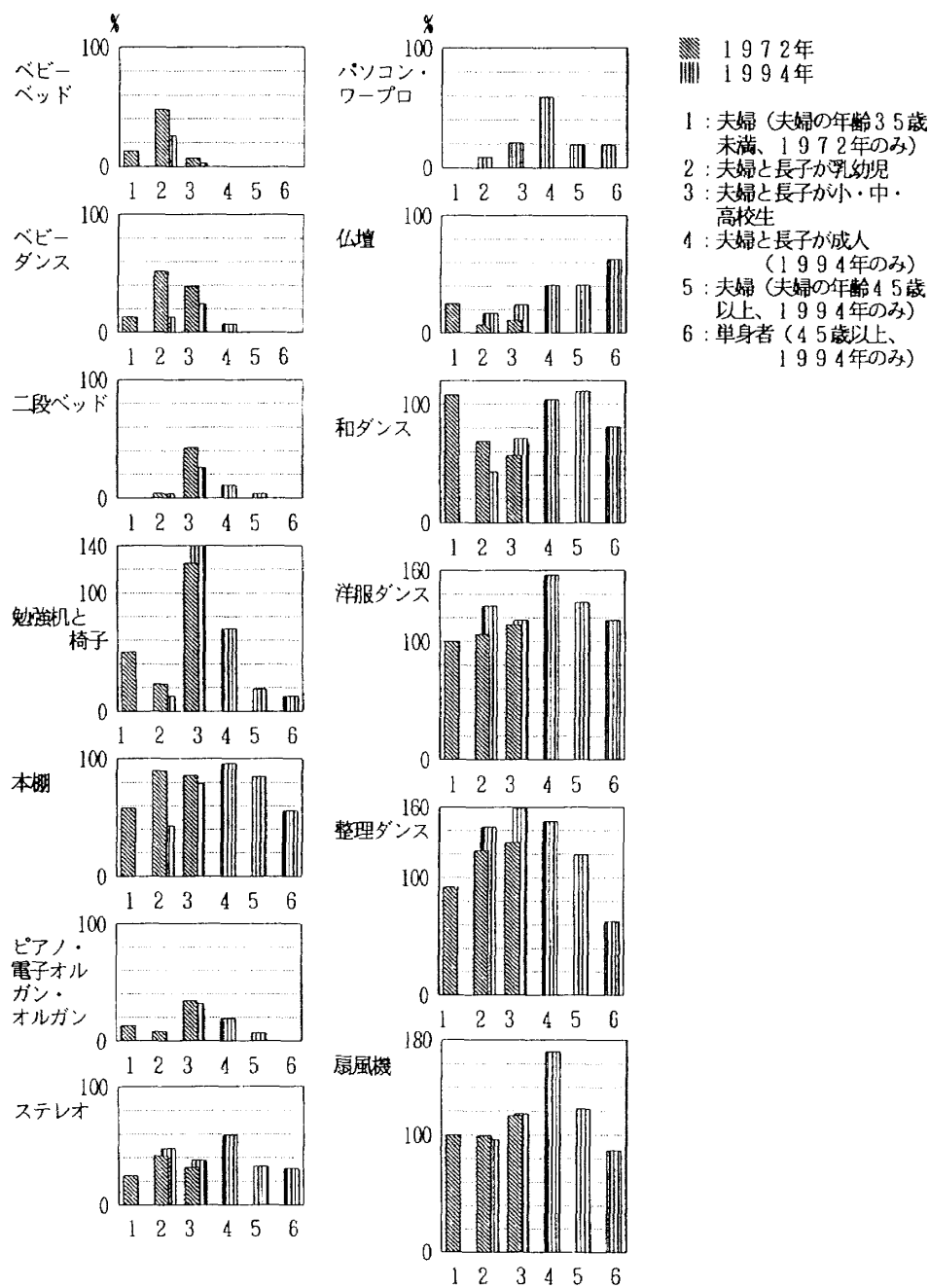


図5. 家族周期と家具保有率

今回調査ではミシンの保有率は低く、該当しなくなっている。また、電気こたつは複合機能を持ち高級化した家具こたつへと移行している。そして、洋服ダンスは基本家具であったが弱ライフサイクル家具になり、この分野の家具が増加する傾向である。

(4) 室別家具数と設置率

1) 室別家具数

表4には表2にあげた家具をもとに室別間取り別平均家具数と両調査で保有率2割以上の家具の設置率を

示した。今回の家具数は3KタイプではA室が最も多く5.3個、C、D室とも4.7個でこれに次いでいる。3DKタイプもA室が最も多く5.6個、次いでD室4.1個、C室3.7個である。そして、B室は両タイプともに最少で2.5個、2.8個である。室別平均家具数は3DKタイプのC、D室以外は22年前に比べて、今回の方が多くなっている。

2) 室別設置率

表4から室別間取り別家具設置率をみると、A室に

はレンジ台、ワゴン、食器棚、冷蔵庫、計量米櫃や食卓と椅子、などの調理用、食事用の家具の他に、玄関でもあるので下駄箱が、また、建築時に洗濯機置き場が設けられていなかったために、洗濯機が置かれている。A室に置かれる家具類は設置率が高く、他室に置かれることは少ない。両タイプともにA室の設置家具の種類や設置率は22年前とはほぼ同傾向を示し、食に関する家具の変化は少ない。これはA室の用途が台所として確立していることによる。3DKタイプでは食卓と椅子、ワゴンが多く、洗濯機、下駄箱が少ないことはDKとしての機能を重視している傾向である。一方、3Kタイプで22年前に比べて洗濯機の設置率が高まっているのは以前にはバルコニー、その他に置かれていたものが給排水設備、家事労働との関連性や浴室への動線からA室に置かれるようになっていくことが窺える。B室は22年前ではミシン、勉強机と椅子、本棚の設置率が高く、就学前後の子ども室、衣に関する家事室や若夫婦の寝室として用いられていたが、今回は両タイプともにミシンは減少し、勉強机と椅子、本棚の他に3DKではタンス類の設置率が高くなっていることは、就学後の子ども室としてばかりでなく、納戸として用いられようとする様子が窺える。C室には22年前には座卓・和机、テレビ、ステレオ、サイドボード・飾り棚が設置されていたが、今回では家具調こたつが加わり、団らんや接客を行っていることが窺える。D室には仏壇、本棚、タンス類、テレビ、鏡台類が置かれており、この部屋は、就寝・更衣に使うと共に祭祀行為にも使用されていることを窺わせている。3Kタイプで仏壇が多いことは老夫婦が多いことが関係している。

3DKタイプではタンス類がD室からB室へ移り、逆に、勉強机と椅子や鏡台類がB室からD室に移行している。これはD室の方が広いことによる。

本棚はB～D室に分散して設置されているが、勉強机と椅子はB室に、テレビはC室に、タンス類はD室に最も多く設置されている。B～D室からはミシン、ベビーベッド、ベビーダンス、ソファー類、ちゃぶ台、座卓の設置も少なくなっている。

ミシンは、ポータブルが主流になり、必要な時以外は押入に納まり、床面を占める家具でなくなっている。

(5) 必要としない家具、愛着のある家具

表5に今回調査における必要としない家具や愛着のある家具などの家具意識を示した。現在必要としない家具としては、和ダンス、ストーブ類などがあげられ

る。そして、これらは愛着があり捨てられないものであり、夫や妻の実家などの現住宅以外に別置されているものでもある。これらの家具の多くは婚礼調度品であり、大型で耐用年数が長く、入手価格も高額で、さらに長年の家族の歴史を語るものとして、経済的価値との関係から捨てられないものとなっている。しかし、その数や種類は22年前に比べて少ない傾向で、その都度、必要なものを求めて行こうとする様子が窺える。和ダンスは日常的に用いられるものではないため、買いい足される家庭がある一方、必要としない家庭も出てくるものと考えられる。

一方、現在欲しい家具は洋服ダンス、整理ダンスなどの衣類収納家具や洗濯機、冷蔵庫、ステレオなどの大型で性能のよい新機種である。家庭電化製品は買換えを希望していることが窺える。また、椅子座家具の導入も希望していることから、椅子式の生活を望んでいるが、住宅の規模、部屋数の点から叶えられないであることを窺わせている。

(6) 事例

前回調査時(1972)から今回の調査時(1994)まで住み続けている家庭は3Kタイプで9家庭、3DKタイプで4家庭、計13家庭である。これらの家庭の使用室や保有家具の変化特性から生活の変容の要因を明らかにする。

1) 家族の変化

家族の変化は表6に示すように、22年の間に家族人数が増加したのは4家庭、減少は6家庭、変化なしは3家庭である。その家族の増加要因は、出生児の増加、減少は子どもの成長独立や配偶者の喪失によるもので、変更なしは夫婦のみの家庭と、世代交替によるものである。今回は夫婦、子ども共に年齢があがり、核家族ではあるが、子ども独立離家直前の成人中心の家族構成となっている。

2) 生活行為室

3Kタイプの食事室は前回調査では3食共に同室が7家庭であったが、今回は9家庭とも3食同室となっている。そして、食事室を変更した家庭は7家庭である。C、D室への移行は家族人数の増加と単身者により、逆にA室への移行は家族人数の減少による。一方、3DKタイプでは3食を同室でとっているのは、前回4家庭すべてであったが、今回は3家庭に減少している。A室が食事室として用いられているが、C室への移行は夫婦のみの家庭で現れ、高齢になるとくつろぎの食事はC室へ移っていることが窺える。3Kタイプ

公営住宅居住者の耐久消費財（主に家具）の保有の現状と課題

表 4. 室別間取り別平均家具数と設置率の変化

		3 K タイプ			3 DK タイプ				
		1972	1994	'94-'72			1972	1994	'94-'72
A 室	平均家具数	4.4 個	5.3 個	+ 0.9 個	平均家具数	5.5 個	5.6 個	+ 0.1 個	
	1. レンジ台	0%	97	+97%	1. レンジ台	0%	100%	+100%	
	2. 洗 濯 機	61	87	+26	2. 食 器 棚	96	97	+ 1	
	3. ワ ゴ ン	91	100	+ 9	3. 冷 蔵 庫	100	100	0	
	4. 食 器 棚	87	86	- 1	4. 計量米櫃	100	100	0	
	5. 冷 蔵 庫	100	97	- 3	5. 食卓と椅子	100	100	0	
	6. 計量米櫃	100	96	- 4	6. ワ ゴ ン	100	100	0	
	7. 食卓と椅子	97	82	-15	7. 洗 濯 機	22	20	- 2	
	8. 下 駄 箱	97	51	-46	8. 下 駄 箱	100	71	- 29	
B 室	平均家具数	2.1 個	2.5 個	+ 0.4 個	平均家具数	2.8 個	2.8 個	0 個	
	1. 整理ダンス	9%	18%	+ 9%	1. 三段ボックス	0%	44%	+ 44%	
	2. 勉強机と椅子	46	53	+ 7	2. 和ダンス	3	24	+ 21	
	3. 本 棚	35	35	0	3. 洋服ダンス	6	24	+ 18	
	4. ミ シ ン	47	33	-14	4. 整理ダンス	15	24	+ 9	
	5. ダブルベッド	74	—	—	5. 鏡 台 類	31	24	- 7	
					6. 本 棚	43	29	- 14	
					7. 勉強机と椅子	66	47	- 19	
					8. ミ シ ン	56	8	- 48	
C 室	平均家具数	4.0 個	4.7 個	+ 0.7 個	平均家具数	4.0 個	3.7 個	- 0.3 個	
	1. 家具調こたつ	0%	71%	+71%	1. 家具調こたつ	0%	86%	+ 86%	
	2. 鏡 台 類	24	34	+10	2. ステレオ	42	57	+ 15	
	3. ステレオ	46	53	+ 7	3. 本 棚	31	32	+ 1	
	4. 洋服ダンス	33	35	+ 2	4. テ レ ビ	70	70	0	
	5. 和ダンス	33	32	- 1	5. 整理ダンス	21	21	0	
	6. テ レ ビ	69	63	- 6	6. 鏡 台 類	42	32	- 10	
	7. 座卓・和机	49	43	- 6	7. 飾 り 棚	72	58	- 14	
	8. 整理ダンス	41	33	- 9	8. ベビーダンス	42	0	- 42	
	9. 本 棚	43	32	-11	9. 一人掛けソファ	56	—	—	
D 室	平均家具数	4.1 個	4.7 個	+ 0.6 個	平均家具数	4.6 個	4.1 個	- 0.5 個	
	1. 洋服掛け	0%	46%	+46%	1. 鏡 台 類	24%	44%	+ 20%	
	2. 仏 壇	27	62	+35	2. 勉強机と椅子	10	27	+ 17	
	3. 本 棚	22	35	+13	3. テ レ ビ	24	26	+ 2	
	4. テ レ ビ	25	37	+12	4. 整理ダンス	63	47	- 16	
	5. 鏡 台 類	43	48	+ 5	5. 洋服ダンス	73	56	- 17	
	6. 和ダンス	59	59	0	6. 和ダンス	91	66	- 25	
	7. ミ シ ン	29	26	- 3					
	8. 整理ダンス	50	44	- 6					
	9. 洋服ダンス	61	52	- 9					

22 年前と今回の両調査で保有率 20% 以上の家具類の設置率を示す。季節用品は除く。ダブルベッド、一人掛けソファの—は保有率 10% 未満のため、% 表示をしていない。

表 5. 家具意識 (1994 年)

1. 現在必要としない家具 (個)	2. 愛着があり捨てられない家具 (個)	3. 現住宅以外に置かれている家具 (個)
和ダンス 5	和ダンス 2	ストーブ類 7
ストーブ類 4	ストーブ類 2	テーブル 6
洋服ダンス 2	ステレオ 2	和ダンス 4
ミシン 2	その他 7	扇風機 3
電気こたつ 2	(サイドボード・下駄箱・洋服ダンス他)	二段ベッド 2
テレビ 2		サイドボード 2
その他 12		下駄箱 2
(下駄箱・本棚・整理ダンス・計量米櫃・食卓と椅子・勉強机と椅子・電子オルガン他)		電気こたつ 2
	5. 欲しい家具 (個)	その他 14
4. 婚礼家具としての入手率 (%)	洋服ダンス 7	(洋服ダンス・ダブルベッド・食卓と椅子・勉強机と椅子・鏡台類・楽器類他)
和ダンス 71	整理ダンス 7	
鏡台類 67	パソコン・ワープロ 7	
洋服ダンス 51	冷蔵庫 4	
整理ダンス 45	洗濯機 4	
食器棚 42	食器棚 4	
下駄箱 36	ステレオ 4	
	テレビ 3	
	テーブル 2	
	その他 7	
	(下駄箱・本棚・ベッド類・長ソファ他)	

の A 室は規模や間取りから食事室として確立しにくいことが、家族人数の増加に対応できにくくしている。

夫婦の寝室は C, D 室であるが、子どもが多く就寝分離を行うときや単身者の場合には B 室が夫婦室になっている。就学時には B 室は子ども室になっているが、子どもがそれ以上の年齢になると夫婦室にもなる。夫の読書・書き物には寝室と異なる室が用いられている。

アイロンかけ・洗濯物をたたむは 3K タイプでは B 室がなくなり、バルコニー側の C, D 室になっている。

団らん、接客、その他の行為室の変化はみられない。

3) 保有家具の種類

総家具数の変化は表 6 に示すように、保有数の増加は 10 家庭、減少は 3 家庭である。家族、住宅タイプに関係なく増加の傾向である。一度保有した家具は減らすことが困難な様子が窺える。

前回調査で全家庭で保有されていたのは表 7 のようにテレビ、洋服ダンス、食器棚、扇風機、冷蔵庫、下駄箱、洗濯機、鏡台類、ストーブ類の 9 種あったが、今回はテレビ、食器棚、和ダンス、冷蔵庫の 4 種に減少し、13 家庭共通の保有品は減少している。独立離家直前の子ども専用として、使用期間が短いため、基

本的機能のみの簡便な家具や複数機能を持つものへ買い替えて、使用可能な床面を保持しようとしていることが窺える。

食事関係家具は、食事室が A 室の時には食卓と椅子が用いられる。しかし、A 室以外では床座家具が用いられているが、これは和室であり、室の用途が多様であることと関係するようである。このことから、A 室を台所兼食事室として確立するためには、このプラン以上の規模と使い勝手を考慮した平面計画が必要ながことが窺える。

衣類収納家具、台所用台家具、ソファ類、冷暖房機器、ミシンやワープロ・パソコンの保有状況の変化は全体の傾向とほぼ同様の傾向を示している。

4. 結 語

間取りの一定した住宅における耐久消費財の保有・使用状況、室の使い方の変化を把握し、家族生活、住宅タイプをめぐる課題を明らかにするため、公営住宅居住者を対象として 22 年前 (1972 年) 調査と比較調査を行い、次のような知見を得た。

(1) バルコニーやいりかわに面した日当たりのよい室は、間取りに関係なく、台所に近い室が家族の公的

公営住宅居住者の耐久消費財（主に家具）の保有の現状と課題

表 6. 事例調査家族、生活行為室と総家具数の変化

家族の変化				生活行為室の変化						総家具数の変化			
家族形態	家族人数 (人)	末子年齢 (歳)		妻の年齢 (歳)		全食事	夫婦の就寝	団らん	接客	本の読書、書き物	アイロン掛け・洗濯物	総家具数 (個)	
		'72	'94	'72	'94	'72	'94	'72	'94	'72	'94	'72	'94--'72
a. 夫婦	2	3	—	19	48	A	B	D	D	D	C	23	27 + 4
b. 夫婦と子	3	4	0	21	48	A, D	C	D	C	D	C	17	24 + 7
c. 夫婦と子	3	7	3	13	48	D	C	D	C	D	C, D	13	37 + 24
d. 夫婦	2	1	—	—	63	A, C	A	D	C	B	D	18	22 + 4
e. 夫婦と子	3	1	1	—	60	A	D	A	C	A	B	14	20 + 6
f. 夫婦と子	4	2	1	—	53	C	A	C	C	B	D	21	23 + 2
g. 夫婦と子	4	2	1	23	50	C	A	D	C	C	C	22	16 - 6
h. 夫婦と子	4	3	0	17	49	C	D	D, C	C	C	D	16	22 + 6
i. 夫婦と子と妹	5	3	9	33	59	B	C	C	D	B	C	17	29 + 12
j. 夫婦と子	3	4	2	20	47	C	A	D	D, B	C	A	20	17 - 3
k. 夫婦	2	2	—	—	52	A	C	D	D	C	C	20	21 + 1
l. 夫婦	2	2	—	—	46	A	A, C	D, C	D	C	C	17	23 + 6
m. 妻と子	2	2	—	—	44	A	A	D	C	—	C	24	20 - 4

A : A室, B : B室, C : C室, D : D室.

表 7. 事例調査家庭の保有数の変化

	1972 (個)	1994 (個)
テレビ	15*	20*
洋服ダンス	15*	19
食器棚	16*	18*
和ダンス	8	17*
扇風機	13*	14
冷蔵庫	13*	13*
整理ダンス	14	13
下駄箱	13*	12
本棚	5	12
家具調こたつ	0	12
洗濯機	13*	12
鏡台類	13*	11
ストーブ類	13*	11
ミシン	11	10
計量米櫃	4	8
食卓と椅子	6	7
レンジ台	0	7
電気こたつ	12	6
ステレオ	5	6
三段ボックス	0	6
勉強机と椅子	5	5
電話台	0	5
座卓・和机	7	4
飾り棚	4	4
サイドボード	4	4
長ソファ	2	4
仏壇	2	4
洋服掛け	0	4
パソコン・ワープロ	0	4
ちゃぶ台	5	3
ベビーダンス	5	3
ワゴン	0	3
ダブルベッド	4	0

* 事例対象全家庭である13家庭で保有。

空間として、他方、奥まった室が就寝や祭祀のための私的空間として用いられる。3DKタイプのA室は食事室として用いられる割合が高いが、食事室は室規模、他室との続き方、家族構成、食事の摂り方によって変わる。

(2) 家具の設置率が高く、玄関、浴室の入り口を兼ねているA室と狭小なB室は家具配置の上からも課題が多い。特に、3Kタイプは平面計画上の課題が多い。

(3) 各室における家具の配置数や設置率は、その室の生活行為に対応して決まるようである。そのため、食事用家具はDKとして確立していると食卓と椅子が

用いられるが、それ以外の室ではちゃぶ台、座卓、家具調こたつの床座家具となる。また、公的空間では多様な生活行為に対応するため、ソファ類やベッド類の椅子座家具が用いられなくなっている。食事用家具、ソファ類、ベッド類は間取り、室規模の影響を受けやすい。

(4) 家庭で保有されている家具は1家庭に1個保有されている洗濯機、冷蔵庫、食器棚の基本的な家具がある。そして、ベビーベッドや勉強机と椅子などの子どもの成長期や仏壇のような高齢期で保有されるライフステージで保有の異なる家具がある。さらに、家族人数や室の状況によって保有数が変動し、1家庭に1個以上保有される家具がある。基本的な家具のための空間確保と家族状況によって保有が変動する家具の処分システムの確立が求められる。

(5) パソコン・ワープロのように、時代や社会状況によって、新たに保有される家具や機器がある。まったく新たな機能を備えた機器の保有は住宅内に置き場所を確保しなければならなくなる。

(6) 22年前に比べ今回は簡易な家具や複数機能を備えた家具が増加し、椅子座家具が保有されなくなっている。

(7) 前回調査時から住み続けている13家庭の家族、住み方、保有家具の変化についてはほぼ全体の傾向と同様であった。

なお、本研究の一部は日本家政学会平成7年度大会にて、発表した。

引用文献

- 1) 経済企画庁調査局(編):『平成6年版家計消費の動向—消費動向調査年報—』, 大蔵省印刷局, 東京, 54-71 (1995)
- 2) 渡辺光雄, 江口敦子: 住空間における家具占有面積の分析(その1), 日本建築学会計画系論文報告集, **352**, 48-58 (1985)
- 3) 富士田亮子: 耐久消費財(主に家具)の管理に関する研究〔I〕所有実態及び住空間との関係について, 広島女学院大論集, **22**, 227-240 (1972)
- 4) 鈴木成文:『建築計画学6, 集合住宅住戸』, 丸善, 東京, 222-224 (1971)
- 5) 富士田亮子: 耐久消費財(主に家具)の管理に関する研究〔Ⅲ〕家族成員との関係について, 広島女学院大論集, **24**, 201-208 (1974)
- 6) 鈴木成文:『建築計画学6, 集合住宅住戸』, 丸善, 東京, 180-184 (1971)